

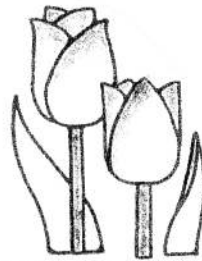
ひまわりからの メッセージ

172号

2026. 4. 13.

NPO 花内のつばき園
西濃園域
発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子



王さんの
「やれる」に励まされて

四月四日の朝日新聞にホームラン王として有名な王貞治さんの記事が載っていました。王さんは、子ども達に野球の楽しさを広めたいと願って、昨年「球心会」を作り、活動して来られたそうです。紙面には、「やれる」と書いた色紙を持つ若々しい王さんの写真も載っていて、この三月末に大台に乗った私も、「よし、今年もやれる」と、力をいいただいたのでした。

私ごとですが、実は、私はこの歳になつたり本を出そうと決めていました。以前、十年位前にお母さん方と一緒に本を出そうかと言っていたこともあったのですが、多忙のために流れてしまいました。子育てや発達に関するもの、三冊目の歌集などと考えたのですが、今回は手はじめに亡父

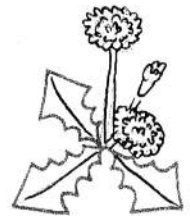
にかかわる「歌の師・歌の友」という本を出すことにしたので、私の父は小さな会社をやっていましたが歌詠みでもあり、その交友を多くの作品に残しました。そこで私にしか書けない父にまつわる歌人の姿を本に残すことにしたので、隙間時間をどう使うかが課題でしたが、やっと初校にこぎつけました。

ところが、そんな時、奇しくも先月の宮代小学校卒業式の中で、次第の中に、校歌の作詞者として父の名を見つけたのです。戦争中に東京から疎開してこの地に移り住んだ父は、校歌の作詞を依頼された折に「余所者の自分の名を出さなくとも良い」と言って、自分の師であり、宮中の歌会始の選者でもあった松村英一校閲として出すことにしたのでした。没後五十年以上経て、しかも私が本を出す年によく作詞者として表に出していたことになることは、何とも不思議なことです。作曲者は私のピアノの師であった岐阜大学教授の米田天海先生で、先生は、私が仕事で訪問する不破高や大垣工業高校の校歌も手がけておられたことを最近知り、人の縁の不思議さを感じています。

今年度も予定はどんどん埋まっていますが、限りある自分の時間をどのように使っていくのか、誰にとっても課題ではないでしょうか。庭先では著菘(しやが)が群れ咲き、雑草の園を華やかにしてくれています。もしかしたら「やれる」と応援してくれているのかもしれない。

日本の未来は

大丈夫……？



先日、二日続けて昔かかわったお子さんのお母さんから電話を受けました。一人は、私と同年令で自閉症の息子さんをもちAさん、もう一人は、私の長女と同年令のBさんです。

Aさんは、地域で色々な方の相談にのっておられ、福祉行政にも詳しく、相談を受けると、その相手のご家族を含めて生活全般を考えてアドバイスされる方なのですが、「少し疲れました」とおっしゃるのです。よくよく話を聞いてみると、「このごろのお母さん達は、子どものことをしっかり見えてませんよね。福祉の事業所に預けておけば良いと思っ親として、自分の死後、この子がどうなっていくのか、どう生きていくのか、自立させていくために親としてどうしていかなくてはいけないかと考えていない人が多すぎると思っています。子どもに関わる学校の先生や行政の人たちも、自分の任期中に問題がなければそれで良いと思っておられるのか、私には熱意が感じられないんです。」

Aさんのおつき合いは、もう半世紀になりますから、自分

の子育てと現在を思うと、おそらく暗澹たる思いがおありになるでしょう。福祉が進んでいるように見えて、実は多くの矛盾があることを知っておられるかうこそ、歎きだと思われています。フルーフホームの現状や後見人制度のことなど、話は尽きることはありませんでした。

翌日、Bさんは、二十代半ばになった息子さんの再就職の報告をして下さいました。知的な遅れはないものの、感覚の問題もあり、LDの特性もあったために、子育てに悩んでこられたBさんは、「親として待つことが大事ですよ。何でも親がやってしまえば早いし、楽だけど、子どもは育たないですよ。今、うちの子は自分で弁当を作って出かけるし、私が手をかけることは何にもありません。色々悩んだし、学校と衝突したこともあったけど、そして少し厳しすぎるかと思ったこともあったけど、やっぱり親がやらなくてはいけないことってありますよね。」

お二人の話を聞きながら、遠い昔のことを思い出してしました。Aさんの子は、こだわりが強く、担任が代わって「このこだわりを治してみせます」と頑張る方になると、決まって問題行動を起したものでした。今なら、そんなことを言う担任などいないでしょうが、それでもまだ「こだわりは悪いもの」と思っている人を見かけることがあります。こだわるのが本人の安心につながっているのだと思ってもうえると良いですね。

Bさんの子は、ある時かんしゃくを起こして周りがある遊具

を周りに投げ散らかしたことがありました。お母さんは、すぐにそれを片づけようとされたのですが、鬼のような私は「お母さんは、その椅子に座るな、本人がやったことは本人に片づけさせます」と制止したことがありました。お母さんはハッと気づかれて、本人が片づけ終わるまで待っておられました。きつと、その時から、Bさんにとって中野は怖い人になったので、今回お母さんの口から「待つことの大切さ」が聞けたのは、嬉しいことでした。

子育ては楽しいけれど難しいものです。子どもは二歳頃から「イヤ」と自己主張しはじめますから、親の思い通りにいかなくなるので、子育てに疲れてしまう親さん方も多いでしょう。何しろ親にとっても始めのことですから、私にしたって娘たちからすれば落第点しかつかないのかもしれない。まして現代は祖父母との同居も少ないでしょうから、身近な困りを聞ける人もいないので、スマホなどに頼ることも多いように思います。

二日程前にスマホを見ていました。ある学校の入学式で校長先生が二つのお願いをされたという記事がありました。一つは教員の勤務時間について、時間内に連絡をしまほしいということ。もう一つはスマホのトラブルは家庭の責任であるということ。スマホ上には色々な意見が見られました。教員は他の公務員やサラリーマンとは違ふと言われて育っ

てきた先生方は、今の働き方改革に対して違和感があり、仕事は時間内では終わらないと思っていらっしゃるでしょう。

けれども先生方にも家庭があり家族があって、長時間職場に居ることができない場合もあるはずで、この校長先生の発言に多くの賛同が寄せられていました。ただ教員という職は、ただ子ども達に知識の伝達をするだけの仕事ではないはずですから、単純に労働時間として終わりにできない面もあり、難しいですね。家庭で子育てに悩む保護者から学校に全ての責任を押しつけられても困りますし、話し合いの場が延延と深夜におよぶなんていうことが許されるようでは困ります。私は家庭と学校は子育ての両輪であると思っていますが、その根底に、信頼という絆がどうしても必要だろうと思います。

さて、校長先生のもう一つのスマホに関しては、色々な相談にのっていると、家庭のルールの無さが気になります。二歳位の幼児にスマホを渡して平気な若いお母さんたちも多く、小学生で自分のスマホを持っている子どもも多くなりました。いつからスマホを持たせるのかを考えると、小学校以前から考えておくべき事ではないのかと思います。「スマホを持っていないと友達の間に入られてもろえない」と言う方もありますが、日頃からの関係性ができていれば、スマホを持っていないでも遊びに誘ってくれますし、私の孫など困ったことはありませんでした。

それよりも、私は電車の中で次のような光景を目にして、

ふと、日本はこれかどうなっていくのかなあ……と不安が頭をもたげたのです。

私の乗った車両は四人席ではなく、座席は車両の側面にある。乗客同士は向き合って座っています。私の正面には四十代後半位の母と、二十代の娘がどちらも足を組んで座っていました。荷物物は母の横に一人分の座席を占めて置かれ、立っている人に譲る気配もなく、電車が終点に着くまで、母親はずっとスマホを操作し続けていました。一度も娘に話しかけることもなく、娘から話しかけることもありません。持ち物の一つの袋には、人気アイドルの嵐のメンバーの似顔絵が描かれていましたので、もしかしたらコンサートの帰途であったのかもしれませんが、スマホに熱中している母親の横で何するでもなく座っている娘の方は、何度も大きくぐさをするのです。大きな口を開けて、対面して座っている私の方を向いて、大きな口に手を当てることもなく……お二人共にマッシュオンにも気を使っというっしやる方達のようにでしたが、いわゆるたしなみという点では、私には残念なに思えたのです。娘さんは、やがて結婚され母親になっていられるでしょうか。この方もまたお母様のようになっていくのかなあ……と。

一月から三月まで、私は大垣市でスマイルブックをお持ちのお母さん方と一緒に、園から小学校、小学校から中学校への引きつぎ会に参加させていただきました。引きつぎ会が始まった十四、五年

5月の予定

- 5/9 関ヶ原家庭教育学級
 - 5/11 センター親の会
スイトピア6F 9:30~
 - 5/12 ヒアサポート
 - 5/13 毎井町支援員研修
 - 5/18 ひまわり学園にて
「就学について」
5歳医療(保健センター)
 - 5/20 療育スタッフ研修
「発達について」垂井役場
 - 5/21 墨保保健センター講話
 - 5/29 養老いちごの会
自立活動研修 18:00~
ソフトピア10F
 - 5/25 海津市療育システム-註研
親たち講話 荒崎=とも園
- 巡回：養老町、輪之内、大垣
成人相談：揖斐川、毎井など

前、私は先生方に対して「この子にはこんな困りがありますから、学校でこんなことに気を配っていただけると助かります」と言うことが多かったと思いますが、今は「お母さん、家庭のルールはありますか?」「家でこんなことに心がけて下さると良いですね」等々、家庭への注文が増えてきています。学校で支援が必要な子ども達はハーパーセントに上ると言われています。では、発達障害の子が増えたのでしょうか。私は時代とともに変わっていく社会や、家族のあり方、子どもの遊びの変化など子どもの発達を妨げていく要因が複雑に絡み合っている。今の子ども達の困りも増大させていると考えられています。前述したAさんの心配は、おそらく十年後二十年後の社会に影を落とすとしていくのではないのでしょうか。責任のがれや、責任の所在を明らかにすることではなく、子ども達にかかわる私達一人ひとりが真剣に向き合っていかなければ、いつかこの国は減っていくのではないかと……そんな思いが胸を過ります。